佐久市埋蔵文化財調査報告書　第15集

蛇塚Ｂ遺跡群

野馬久保遺跡

Nomakubo

長野県佐久市新子田蛇塚Ｂ遺跡群野馬久保遺跡発掘調査報告書

１９９２，３

佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター

本文目次

例言
凡例
本文目次・写真図版目次・挿図目次
第Ⅰ章　発掘調査の経緯
　1　調査に至る動機
　2　調査の概要
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
　1　遺跡の自然的環境
　2　遺跡の歴史的環境
第Ⅲ章　層序
第Ⅳ章　遺構と遺物
　1　住居址
　　1）Ｈ１号住居址
　2　溝状遺構
　　1）Ｍ１号溝状遺構
　　2）Ｍ２号溝状遺構
　3　トレンチ及び既出遺物
第Ⅴ章　まとめ

写真図版目次

図版一　Ｈ１号住居址・カマド
図版二　Ｈ１号住居址カマド
　　Ｍ１号溝状遺構
図版三　Ｍ２号溝状遺構
図版四　遺跡近景
　　Ｍ２号出土須恵器
図版五　Ｈ１号出土遺物
図版六　Ｈ１号出土遺物

挿図目次

第１図　野馬久保遺跡位置図
第２図　野馬久保遺跡位置図
第３図　周辺遺跡分布図
第４図　野馬久保遺跡層序模式図
第５図　Ｈ１号住居址実測図
第６図　Ｈ１号住居址カマド実測図
第７図　Ｈ１号住居址出土土器実測図
第８図　Ｈ１号住居址出土鉄製品実測図
第９図　Ｍ１号溝状遺構実測図
第10図　Ｍ１号溝状遺構実測図
第11図　Ｍ１号溝状遺構出土遺物実測図
第12図　Ｍ２号溝状遺構実測図
第13図　Ｍ２号溝状遺構実測図
第14図　Ｍ２号・既出遺物実測図
第15図　既出遺物実測図
第16図　野馬久保遺跡全体図

例　　言

1　本書は、1990年12月25･26日及び1991年１月16日～29日に渡って調査した、長野県佐久市大字新子田字野馬久保1928-2に所在する蛇塚Ｂ遺跡群野馬久保遺跡の調査報告書である。

2　本調査は、与志本林業株式会社の委託を受けた佐久市教育委員会が実施した。

3　本調査は、羽毛田卓也を担当者とし、多数の方の協力を得て実施した。

4　上記遺跡に関わる総ての資料は、佐久市教育委員会の責任下に保管されている。

5　本書作成の主たる作業分担は以下のとおりである。

遺物実測、遺構・遺物トレス	神津ツネヨ　小林よしみ　羽毛田卓也
遺構・遺物写真、執筆・編集	羽毛田卓也

6　調査の成果は以下の通りである。

検出遺構	平安時代の竪穴住居址　１軒	溝状遺構　２条	
出土遺物	縄文時代	土器、石器（打製石斧）	
	平安時代	土師器（甕、坏）、墨書土器、須恵器（甕、坏）	
		灰釉陶器（皿）、鉄製品（刀子、麻引）、鉄滓	

凡　　例

1　遺構の略称　　Ｈ→住居址　　Ｍ→溝状遺構

2　遺構・遺物の縮尺は図中にスケールを付したので参照されたい。

3　挿図中におけるスクリーン・トーンは下記のものを表す。

　１）遺構　断面図地山→斜線

　２）遺物　須恵器・灰釉陶器→断面に点　黒色処理→内面に点

4　遺構の海抜標高は、各遺構ごとに統一し、水糸ライン上に水糸標高として明記した。

5　写真図版・表中の番号（例５－３）は、挿図番号（例第５図の３）と対応する。

6　土層の色調は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修・(財) 日本色彩研究所色票監修1987年度版『新版　標準土色帖』の表示に基づいて示した。

7　挿図中の略記号は、Ｐがピット、Ｓが石を表す。

8　遺構挿図中、ピット付近の－数値（例－12）はピットの深さを示す。

9　表中の（　）で表した数値は推定値を示す。

第Ⅰ章　発掘調査の経緯

1　調査に至る動機

蛇塚Ｂ遺跡群は、佐久市大字新子田に所在し、標高700～715mの微高地状平地に展開する遺跡群である。野馬久保遺跡は、本遺跡群南西端の字野馬久保に所在する平安時代を主とする遺跡である。

今回、与志本林業株式会社が行う宅地造成に伴い、同社と佐久市教育委員会とで協議の結果、事前に試掘調査を行うこととなった。試掘調査の結果遺構が確認され、再度協議の結果本遺跡の破壊を余儀なくされ、緊急に記録保存する必要が生じた。そこで与志本林業株式会社より委託を受けた佐久市教育委員会が主体となって発掘調査を行う運びとなった。

第１図　野馬久保遺跡位置図（1:50,000）

第2図　野馬久保遺跡位置図（1:5,000）

2　調査の概要

1　遺跡名　　蛇塚B遺跡群野馬久保遺跡

2　所在地　　佐久市大字新子田字野馬久保1928－2

3　調査面積　2931㎡

4　調査期間　1990年　12月25日・26日　試掘調査

　　1991年　1月16日～29日　本調査

　　1991年　12月3日～14日　整理調査

5　事務局　（平成2年度）

佐久市教育委員会埋蔵文化財課　佐久埋蔵文化財調査センター

教育長　　大井季夫

教育次長　　小池八郎

開発公社事務局長　須江吉介

埋蔵文化財課長　相沢幸男（兼佐久埋蔵文化財調査センター所長）

管理係長　桜井牧子

管理係　東城公人　田島清巳　関口美咲

埋蔵文化財係　高村博文　林　幸彦　三石宗一　須藤隆司　小山岳夫　小林真寿　羽毛田卓也　翠川康弘、竹原学　助川朋広

（平成３年度）

佐久市教育委員会埋蔵文化財課　佐久埋蔵文化財調査センター

教育長　大井季夫

教育次長　奥原秀雄

開発公社事務局長　佐々木正泰

埋蔵文化財課長　上原正秀（兼佐久埋蔵文化財調査センター所長）

管理係長　桜井牧子

管理係　山崎明　関口美咲　渡辺紀美子

埋蔵文化財係長　草間芳行

埋蔵文化財係　高村博文　林幸彦　三石宗一　須藤隆司　小林真寿　羽毛田卓也　竹原学

6　調査団　（平成２年度）

調査団長　黒岩忠男（佐久考古学会副会長）

調査副団長　白倉盛男（佐久考古学会副会長）

藤沢平治（佐久市文化財保護審議委員）

調査担当者　羽毛田卓也

調査員　橋詰信子　山崎平八郎　飯沢つや子　神津ツネヨ　依田みち

（平成３年度）

調査団長　黒岩忠男（佐久考古学会副会長）

調査副団長　白倉盛男（佐久考古学会副会長）

藤沢平治（佐久市文化財保護審議委員）

調査担当者　羽毛田卓也

調査員　小林よしみ　神津ツネヨ

第II章　遺跡の位置と環境

1　遺跡の自然的環境

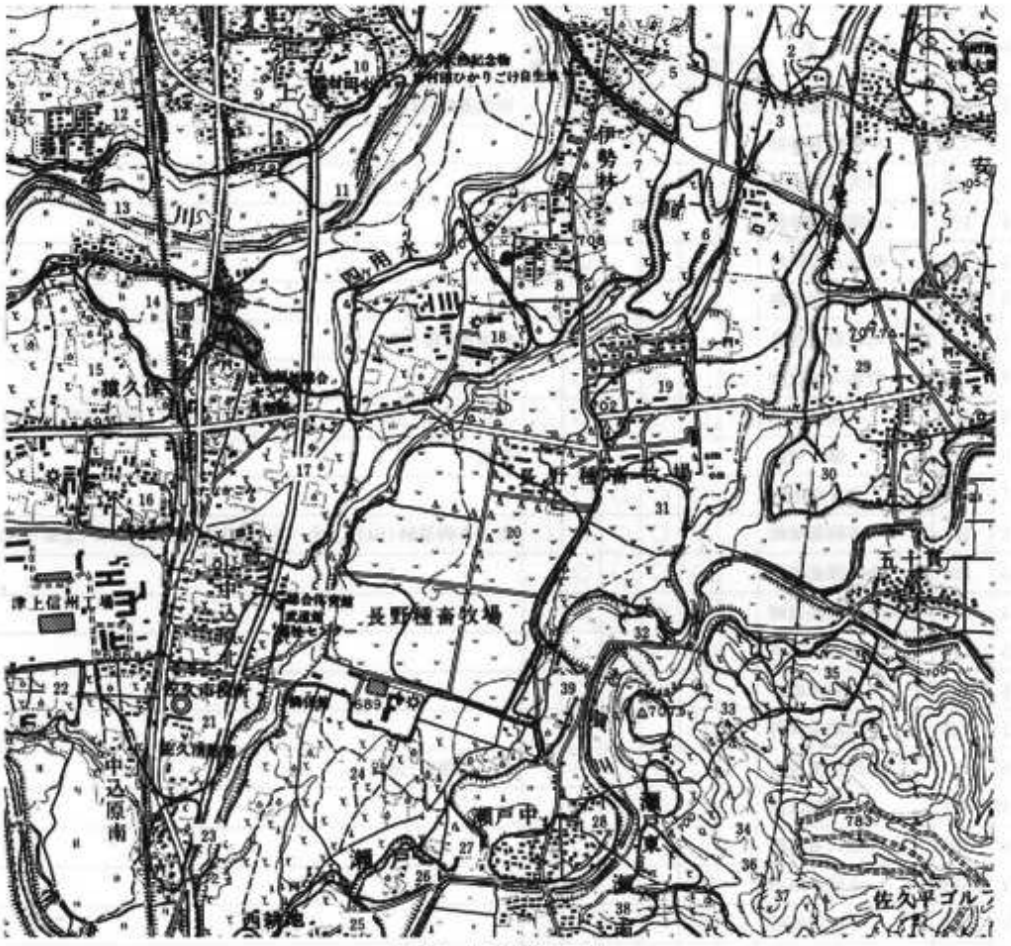
佐久平は、北にA級火山である浅間山を主とする三国山脈の南端峰、東に八風山・寄石山・物見山・荒船山等からなる関東山地、南西に八ケ岳と、四方を山々に囲まれた標高700m～800m内外の盆地で、長野県の中央東端にあたり群馬県に接している。中央部を佐久地方南端の甲武信ヶ岳に源を発する千曲川が北進し、湯川・濁川・志賀川・香坂川・滑津川・片貝川・大沢川・中沢川・宮川等小河川がそれに向かって集まり、大小の扇状地を形成している。長野から佐久にかけての千曲川流域は、北海道とともに日本の小雨地帯で、年間降水量は長野941ミリ・上田870ミリ・東部946ミリ・佐久が908ミリである。佐久盆地は年間の降水量が軽井沢を除き1000ミリに達せず、年平均気温は10度を切る典型的な中央高地型気候である。また標高800mを越える山間部は高冷地気候を呈する。

佐久平の北側は、浅間山の火山噴出物によって厚く覆われ、雄大な山麓を形成している。また山麓には、火山噴出物の性格上水の各種作用を受けやすいため、大小様々な峡谷や「田切り地形」と呼ばれる帯状台地と帯状低地の交互地形が見られる。今回調査した遺跡は、佐久平の中央やや東寄り、浅間山に源を発する湯川の河岸段丘最上面に位置し、都合、安原付近より南下してきた田切りと湯川に挟まれた標高700～715mの微高地上に展開する。湯川は小河川を集めつつ軽井沢・御代田と西寄りに南下し、本遺跡付近で西に進路を変え、そのまま西進して落合で千曲川と合流する。

2　遺跡の歴史的環境

蛇塚B遺跡群は、平安時代が主体の遺跡群で、昭和54年と58年に調査され平安時代の集落が検出されている。なお今回の調査にあたり縄文時代中期の浅鉢の破片と打製石斧、古墳時代後期の甕の破片が検出された。これにより、付近に縄文時代と古墳時代の遺構の存在する可能性が考えられる。

本遺跡群北側には蛇塚A遺跡群（表１－５）、西側には田切りを隔てて東内池遺跡（６）・高師町遺跡群（４）・猫久保遺跡群（３）等が展開する。いずれも平安時代を主とする遺跡であり本遺跡群も含めかなりの数の平安時代の集落群が予想できる。また本遺跡群南西には隣接して弥生時



第３図　周辺遺跡分布図

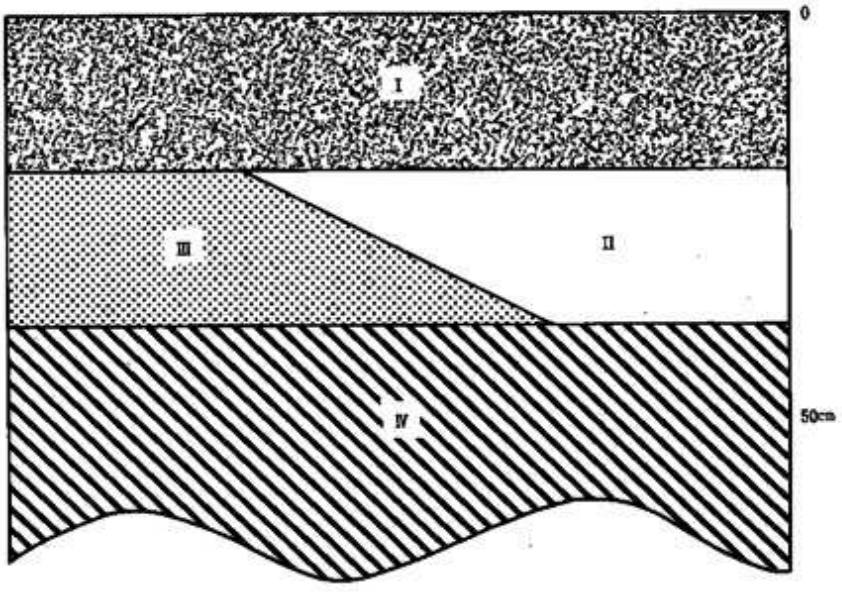
代から平安時代にかけての複合遺跡群である野馬窪遺跡群（１８）が展開する。本遺跡とは帯状低地を挟んで展開しており、南西に１００ｍ離れた地点に野馬窪古墳が存在する。

本遺跡周辺には、本遺跡の名前となった野馬久保はじめ、北野馬久保、野馬窪などの地名が残っている。漢字がそのままの意味を表すとすれば、野馬のいた凹地あるいは野馬除の溝があった場所等が考えられる。野間より転じて野馬と字を当てていた場合は、野原の間の凹地とも考えられる。現在は残存する田切り状低地を除いては割合に平坦な地形である。この地名がついた当初はおそらく多くの凹地か大きな凹地が存在しただろうと考えられる。なお本遺跡群南側の田切り状低地には中島という地名がつけられている。他に馬のつく地名は一ヶ所しかなく、その意味では馬地名が集中するこの場所は興味深い。

第1表　周辺遺跡一覧表

No.	佐分No.	遺跡名	時代						備考
			縄文	弥生	古墳	奈良	平安	中世	
1	130	箭畑遺跡群	○				○		田端遺跡(H1)
2	127	戸屋敷遺跡群					○		
3	128	猫久保遺跡群					○		
4	129	高郎町遺跡群					○		
5	119	蛇塚A遺跡群					○		
6	121	東内池遺跡					○		
7	120	蛇塚B遺跡群					○		蛇塚B遺跡(S54、58)
8	120	野馬久保遺跡	△		△		○		今回調査
9	117	上の城遺跡群	○	○	○	○	○	○	上の城遺跡(S48)、上の城丹過遺跡(S54)、西八日町(S58)
10	542	藤ケ城跡							近世
11	124	岩井堂遺跡		○	○	○	○		
12	105	一本柳遺跡群		○	○	○	○	○	東一本柳遺跡(S43)、北一本柳遺跡(S47)、東大門遺跡(S63)
13	100	中鳴澤遺跡群		○	○	○	○		
14	123	猿久保屋敷添遺跡		○	○	○	○		
15	107	寺畑遺跡群		○	○	○	○		
16	247	西妻神遺跡		○			○		
17	248	番屋前遺跡群		○			○		
18	122	野馬窪遺跡群		○	○	○	○		野馬窪遺跡(S56)
19	251	小池遺跡		○	○	○	○		
20	250	馬瀬口遺跡群		○			○		
21	249	大塚遺跡群		○			○		
22	241	中原遺跡群	○	○	○	○	○	○	
23	346	深堀城跡						○	
24	255	深堀遺跡群	○	○	○	○	○	○	
25	333	東千石平遺跡群			○	○	○	○	
26	335	八反田遺跡					○		
27	347	八反田城跡						○	
28	336	中反遺跡群					○		
29	263	戸坂遺跡群		○	○	○	○	○	戸坂遺跡(S46)
30	275	鳥坂城跡						○	
31	252	和田上遺跡群	○	○	○	○	○	○	和田上南遺跡(S54)
32	253	和田遺跡	○	○	○	○	○		
33	257	中条峯城跡						○	H1～
34	337	中条峯遺跡	○		○	○	○		H1～
35	256	寄山遺跡群	○				○	○	H1～
36	338	南海道遺跡			○	○	○		
37	339	宮の脇遺跡	○		○	○	○		
38	348	城山城跡						○	

第Ⅲ章　層序



第４図　野馬久保遺跡層序模式図

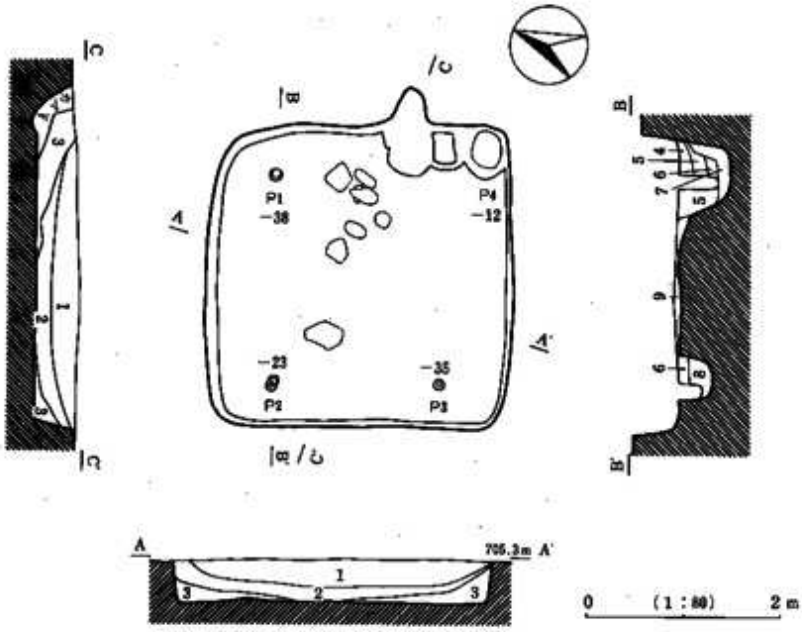
野馬久保遺跡は、標高705m～706mを測り、南西方向に緩やかに傾斜する。基本層序は、調査区東側及び西側において観察した。

第Ⅰ層は耕作の影響下で成立した黒褐色土、第Ⅱ層はローム粒子を微量含む黒色土、第Ⅲ層はローム粒子とパミス中粒以下を少量含む褐色土、第Ⅳ層は明黄褐色ロームである。確認された遺構はすべて、第Ⅳ層の上面において検出された。

第Ⅳ章　遺構と遺物

1　住居址

1）Ｈ１号住居址



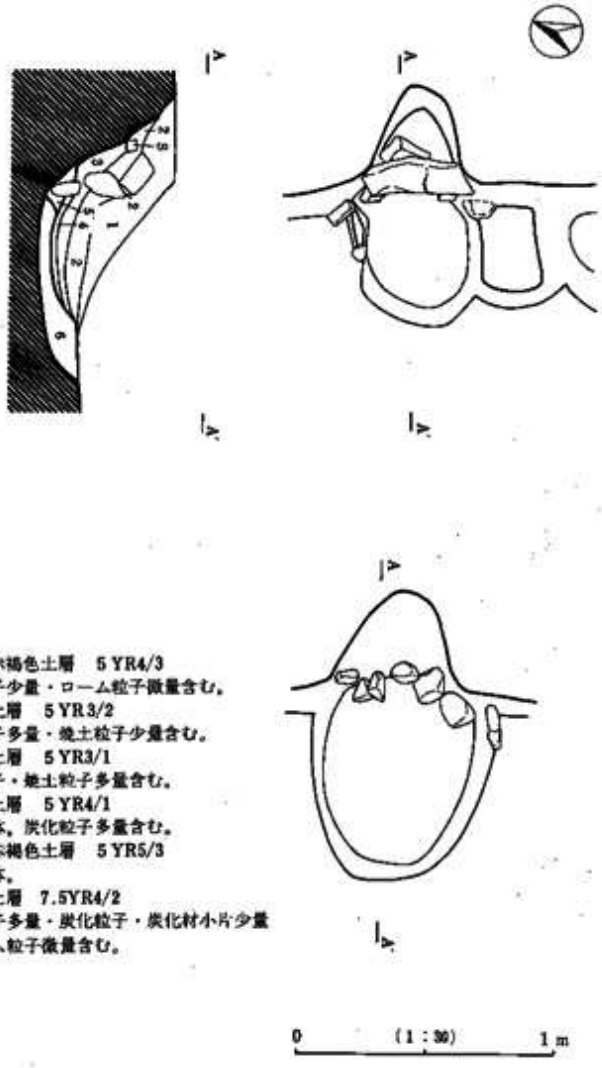
1　黒褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・パミス微量含む。10YR2/2
2　黒色土層　粘性やや強し。炭化粒子微量含む。10YR2/1
3　褐色土層　粘性弱し。ローム粒子少量、パミス極小粒微量含む。10YR4/4
4　黒褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子微量含む。10YR2/2
5　にぶい黄褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子少量含む。10YR4/3
6　黒色土層　粘性やや弱し。ローム粒子・炭化粒子微量含む。10YR1.7/1
7　暗褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子(ブロック状)少量含む。10YR3/4
8　褐色土層　粘性やや弱し。ローム粒子(ブロック状)多量含む。10YR4/6
9　暗褐色土層　粘性やや強し。貼床。ローム粒子微量含む。7.5YR3/3

第５図　Ｈ１号住居址実測図

Ｈ１号住居址は、調査区の北東に位置し、第Ⅳ層上面において検出された。

平面形態は、南北293cm、東西297cmを測り、方形を呈している。主軸方位はＥ－23°－Ｎを指す。また床面積は8.44m²を測る。

覆土は３層が確認された。なお第４層から第８層は柱を据える際の埋土と考えられる。

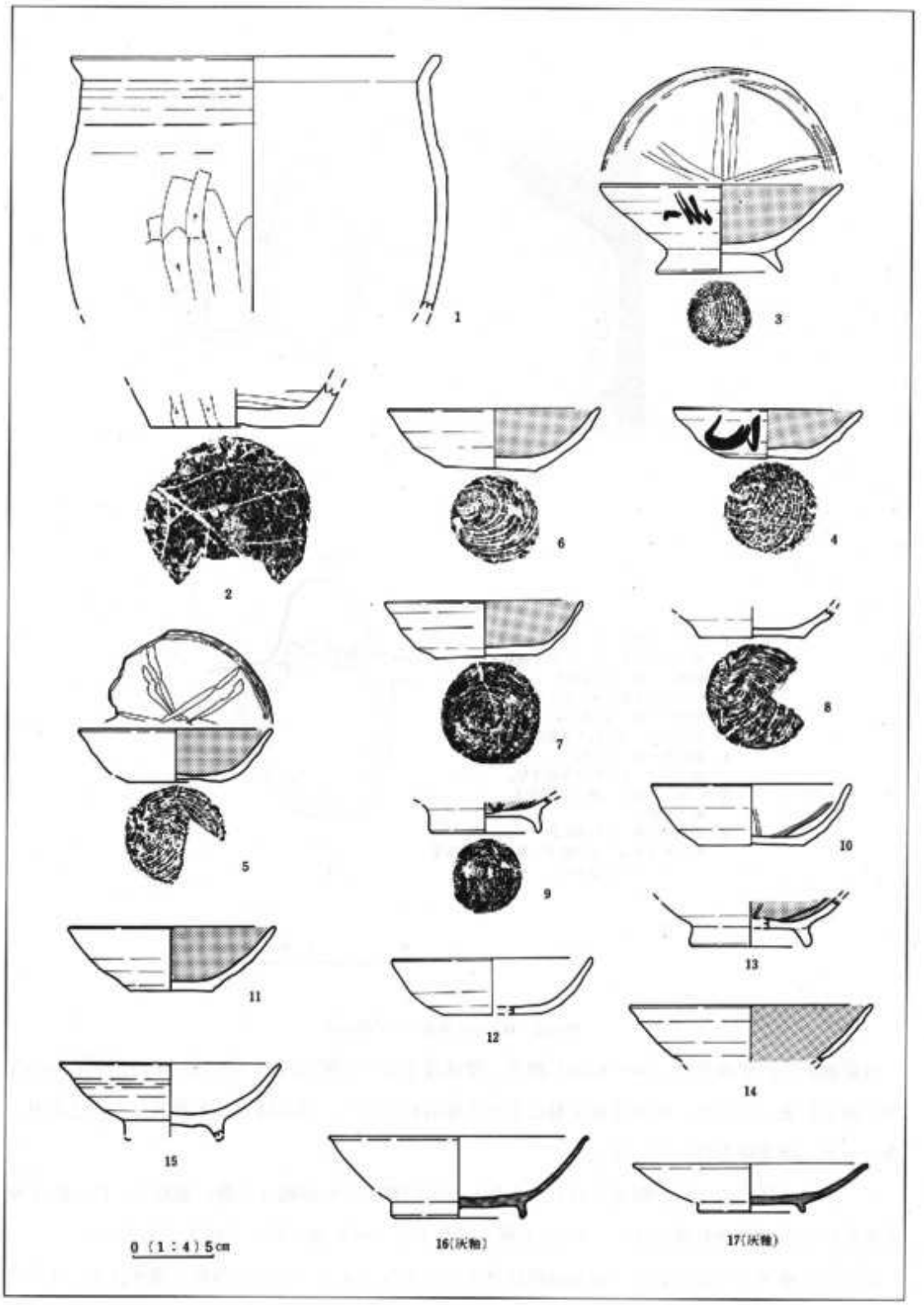


第6図 H1号住居址カマド実測図

確認面からの壁残高は、36～49cmを測り、壁体は平滑で比較的堅固である。床面はおおむね平坦で固くしまっており、貼床は第9層によって貼られていた。壁はほとんど垂直に立ち上がり、各コーナーは丸味を持っている。

ピットは主柱穴の4個が確認された。またピットの覆土は柱痕掘りの際に観察し、P_4・P_2を除き炭化粒子を少量含む黒色土で、P_2は上層が暗色土で下層が他と同じ黒色土であった。

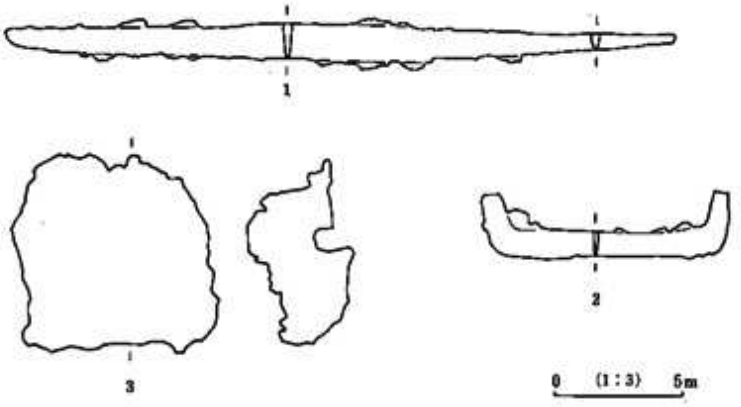
以上より推考できる住居址の構築過程は以下のとおりである。竪穴を四角く掘り込み、床に土を貼り平にする。その後柱穴を掘り下げ、柱を据えながら柱穴を埋め戻す。カマドはこの時点よ



第7図　H1号住居址出土土器実測図

第２表　Ｈ１号住居址出土土器一覧表

挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
7-1	甕	口径23.2 現高15.8	胴部は長胴でやや厚みがある。 口辺は短く外反する。頸部はコの字に近似。	口辺内外面 頸部・胴上部外面ロクロヨコナデ 頸部・胴部内面ヘラナデ	
7-2	甕	底径10.5 現高2.4	底部平底	外面ヘラケズリ。内面ヘラナデ。 底部木葉痕	
7-3	坏	口径15.0 台径7.6 器高5.5	貼付け高台	外面ロクロヨコナデ。底部回転糸切り。 内面暗文風ヘラミガキ。 内面黒色処理。	墨書「不明」
7-4	坏	口径11.8 底径4.95 器高3.05	やや小ぶり	内外面ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。 内面黒色処理。	墨書「了」 外面口縁部に炭化物付着
7-5	坏	口径(12.0) 底径 6.0 器高3.3	底部上底	外面ロクロヨコナデ。 内面暗文風ヘラミガキ。 内面黒色処理。	
7-6	坏	口径13.2 底径5.7 器高4.1	やや歪む。	内外面ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。 内面黒色処理。	内外面に黒色の炭化物付着
7-7	坏	口径12.2 底径6.4 器高3.5		内外面ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。 内面黒色処理。	
7-8	坏	底径6.5 現高1.8		内外面ロクロヨコデナ。 底部回転糸切り。	
7-9	坏	台径7.0 現高2.2	貼り付け高台	外面ロクロヨコナデ。内面黒色処理。 内面暗文風ヘラミガキ。	
7-10	坏	口径(12.2) 底径6.6 器高3.8		外面ロクロヨコナデ。 内面暗文風ヘラミガキ。 底部回転糸切り。	
7-11	坏	口径(12.8) 底径5.2 器高4.0		内外面ロクロヨコナデ。 内面黒色処理。 底部回転糸切り。	
7-12	坏	口径(12.4) 底径6.0 器高3.5		内外面ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。	
7-13	坏	台径(7.6) 現高2.8	貼り付け高台	外面ロクロヨコナデ。内面黒色処理。 内面暗文風ヘラミガキ。	
7-14	坏	口径(15.2) 現高3.5		内外面ロクロヨコナデ。 内面黒色処理。	
7-15	坏	口径13.8 現高4.8	貼り付け高台	内外面ロクロヨコナデ	
7-16	皿 (灰釉)	口径(16.0) 台径7.9 器高5.1	削り出し高台	内外面ロクロヨコナデ。 高台・底部を除く全面に施釉。	
7-17	皿 (灰釉)	口径(14.6) 台径6.4 器高3.05	削り出し高台	内外面ロクロヨコナデ。 高台・底部を除く全面に施釉。	



第8図　H1号住居址出土鉄製品実測図

第3表　H1号住居址出土鉄製品一覧表

挿図番号	器種	法量 cm	質量 g	特徴
8-1	刀子	全長 25.9 刃渡り 16.6 背厚 3.0 柄長 9.3	42.4	欠損の無い大型の製品。 柄の部分に木質が一部残存して付着。
8-2	麻引	全長 9.5 刃長 8.5 刃部巾 1.0	13.8	欠損の無い完全製品
8-3	鉄滓	7.4×7.6	222.7	

り構築が始まる。

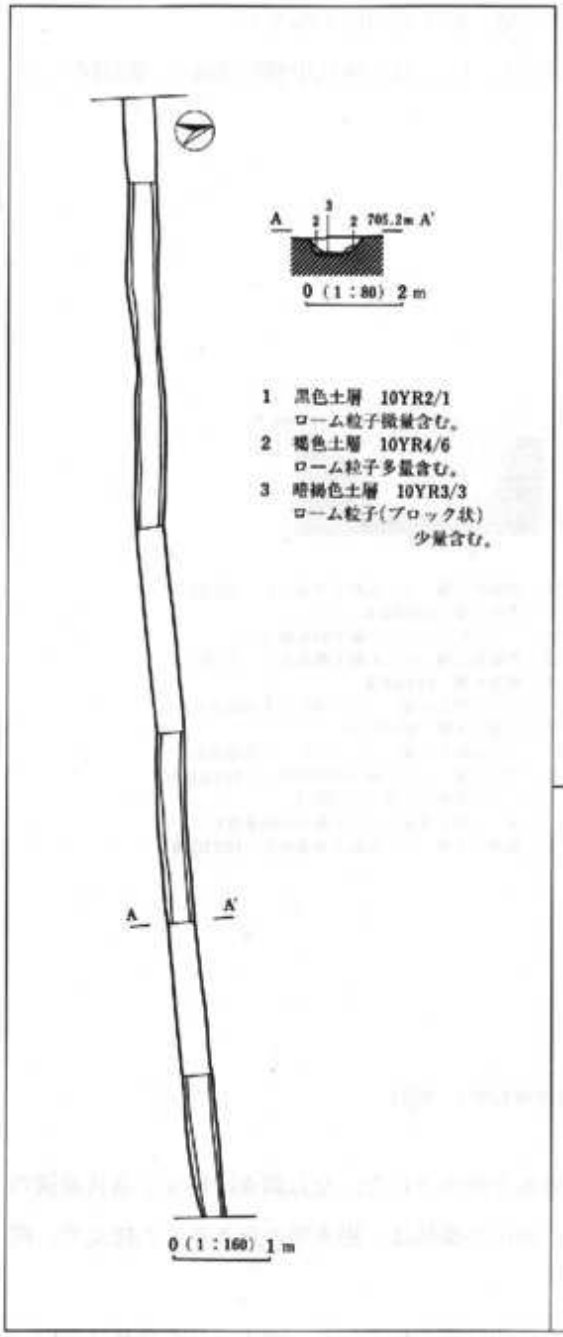
カマドは東壁中央やや南寄りで検出された。残存状況は悪く、安山岩製の煙道天井石とそれを支える安山岩が残存するのみだった。焚口より煙道出口までは93cmを測る。覆土は4層が確認された。構築状況は以下のとおりである。煙道下部と支脚石下部、左右の煙道壁面は第5層によって、燃焼部下部は第6層によって構築される。袖部は安山岩を構築材として第5層によって構築されたと考えられる。また袖及び袖天井に使われたと考えられる安山岩がカマド西側の住居址床面に散乱していた。煙道天井部及び壁面はかなり安定した状況で残っているのに対し、袖部は不自然に壊れている。燃焼部に構築材が崩れ込んでいないことや住居址床面の構築材散乱状況からも人為的に破壊された可能性が高い。

遺物は土師器の甕・坏、須恵器の甕と壺片、灰釉陶器の皿、鉄滓、刀子、麻引金具等が出土した。

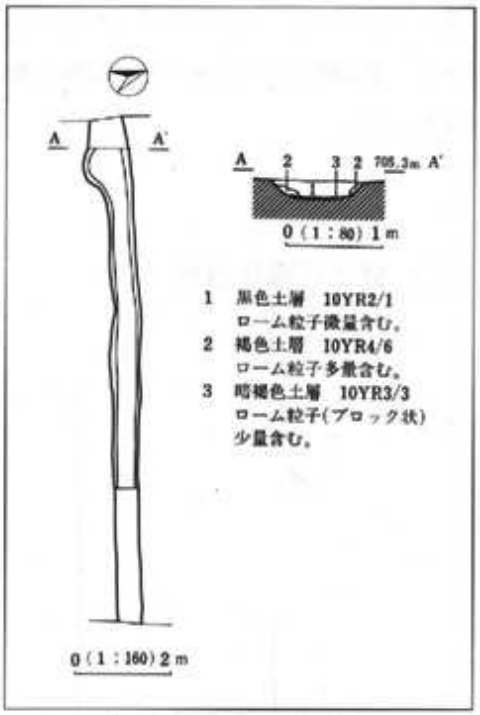
以上より本住居址は、平安時代中期に位置付けられる。

2　溝状遺構

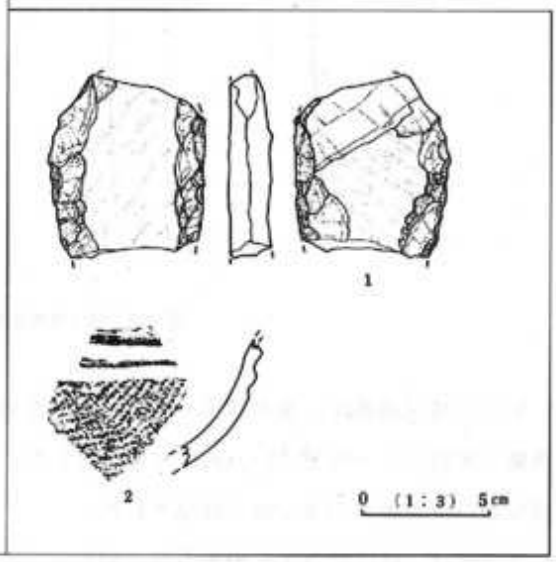
1）M１号溝状遺構



第９図　M１号溝状遺構実測図



第10図　M１号溝状遺構実測図



第11図　M１号溝状遺構出土遺物実測図

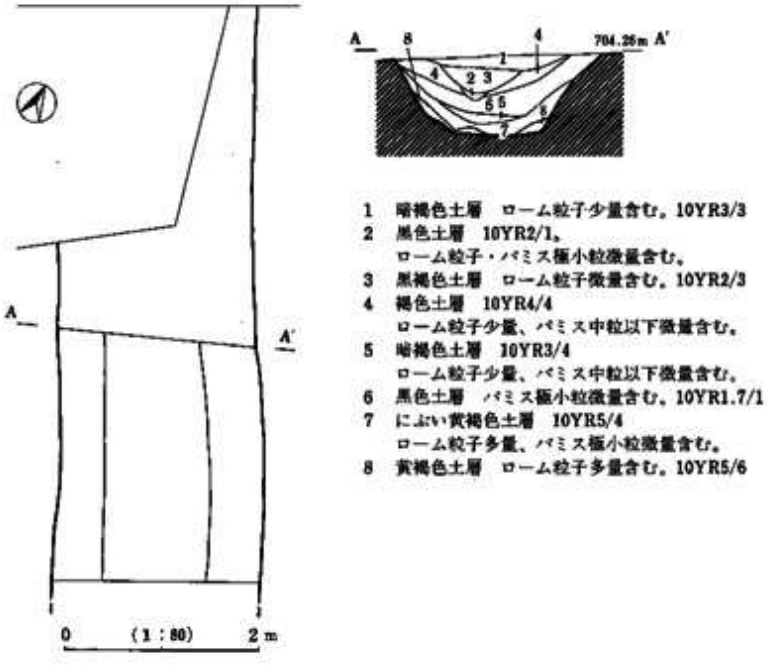
Ｍ１号溝状遺構は、調査区北側において単独で検出された。

本遺構は、ほぼ東西方向に直線的に掘られている。検出された全長は4488cmで、巾は一部を除き50～65cmを測る。東端と西端の底面のレベル差はなく、検出中央部がやや低い。

覆土は３層が確認された。第３層は非常に固く、均一に平坦面をもつことより、第３層上面が使用面と考えられる。仮に使用面と断定しても本遺構の使用目的は不明である。

遺物は、平安時代の土師器坏片、打製石斧（第11図－１）、縄文時代中期の浅鉢片（第11図－２）等が出土した。

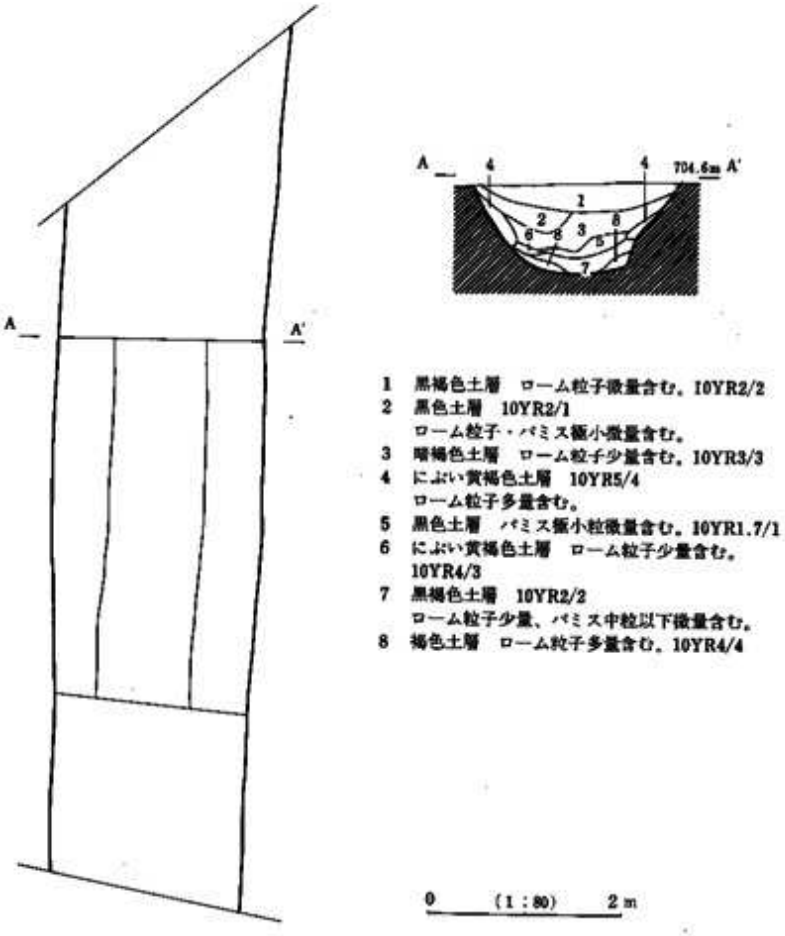
２）Ｍ２号溝状遺構



第12図　Ｍ２号溝状遺構実測図（東区）

Ｍ２号溝状遺構は、調査区南～西側において単独で検出された。なお調査は便宜上溝状遺構の西側と東側の２ヶ所で行い、西区・東区とした。西区の攪乱は、樹木等の抜き取りの攪乱で、同様な攪乱が調査区の至る所で確認された。

本遺構は、ほぼ北西から南東方向に向かって直線的に掘られている。検出された全長は4662cmで、巾は210cm内外を測る。東端と西端の底面のレベル差は37cmで、勾配率は0.8%を測り、北西

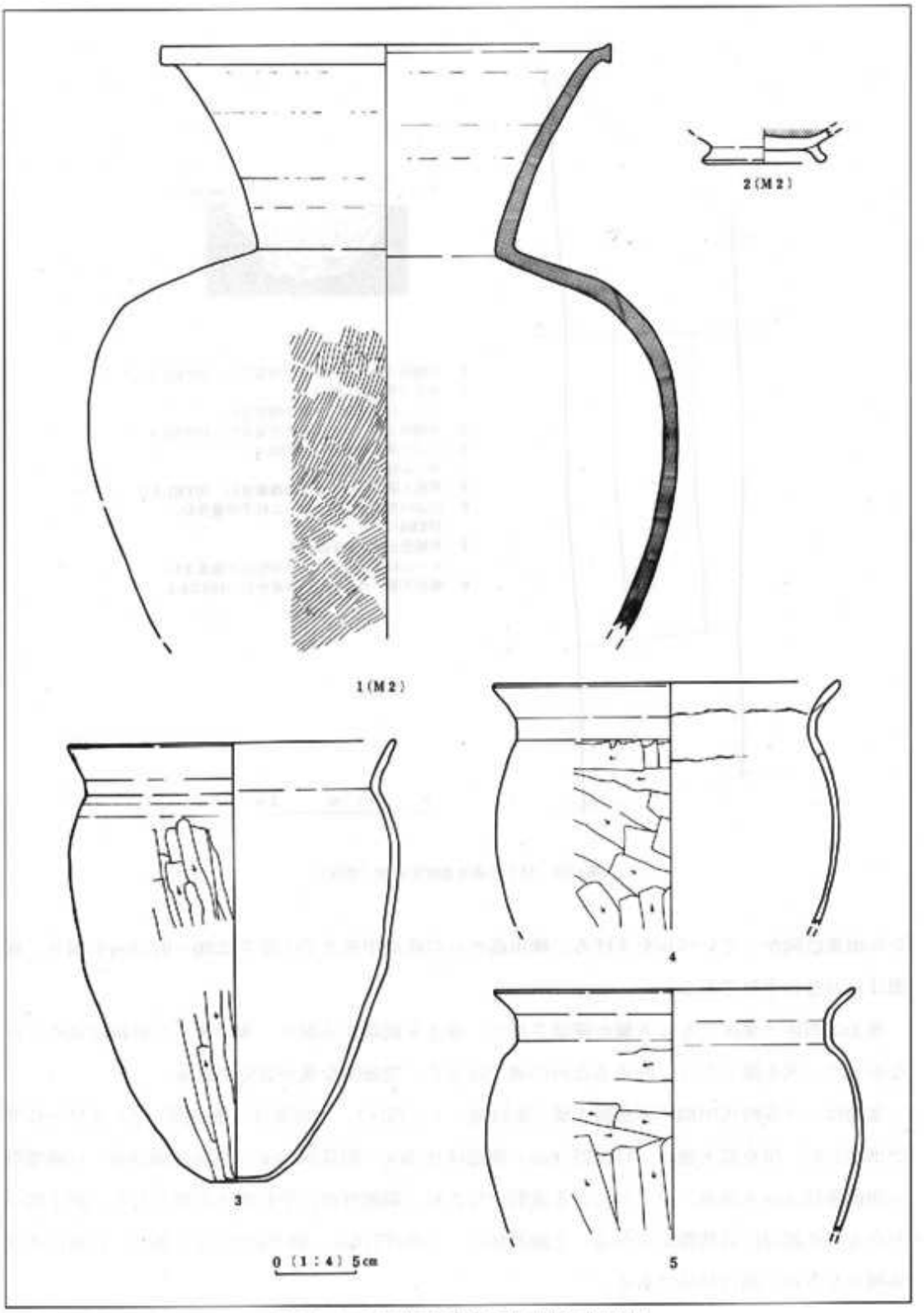


第13図　M２号溝状遺構実測図（西区）

から南東に向かってレベルを下げる。検出面からの底面中央までの深さは86～97.5cmを測り、底面はおおむね平坦である。

覆土は西区・東区ともに８層が確認された。覆土を観察する限り、水の流れた痕跡は認められなかった。水を流したり、貯めるための溝ではなく、空堀的な溝が想定される。

遺物は、平安時代中期の須恵器大甕（第14図－１、西区）、土師器坏（第14図－２）及び坏片等が出土した。須恵器大甕は、口径27.8cm・頸部径16.0cm・胴径36.4cm・残存高36.5cm・口縁端部～頸部長12.6cmを測る。ロクロによる成形がなされ、胴部外面に平行叩きが施される。胴上部いわゆる肩の部分に自然釉がかかる。土師器坏は、台部径7.6cm・残存高2.1cmを測り、内面に黒色処理がなされた高台付坏である。



第14図　M2号溝状遺構出土土器・既出遺物実測図

3　トレンチ及び既出遺物

第15図　既出遺物実測図

第4表　既出遺物一覧表

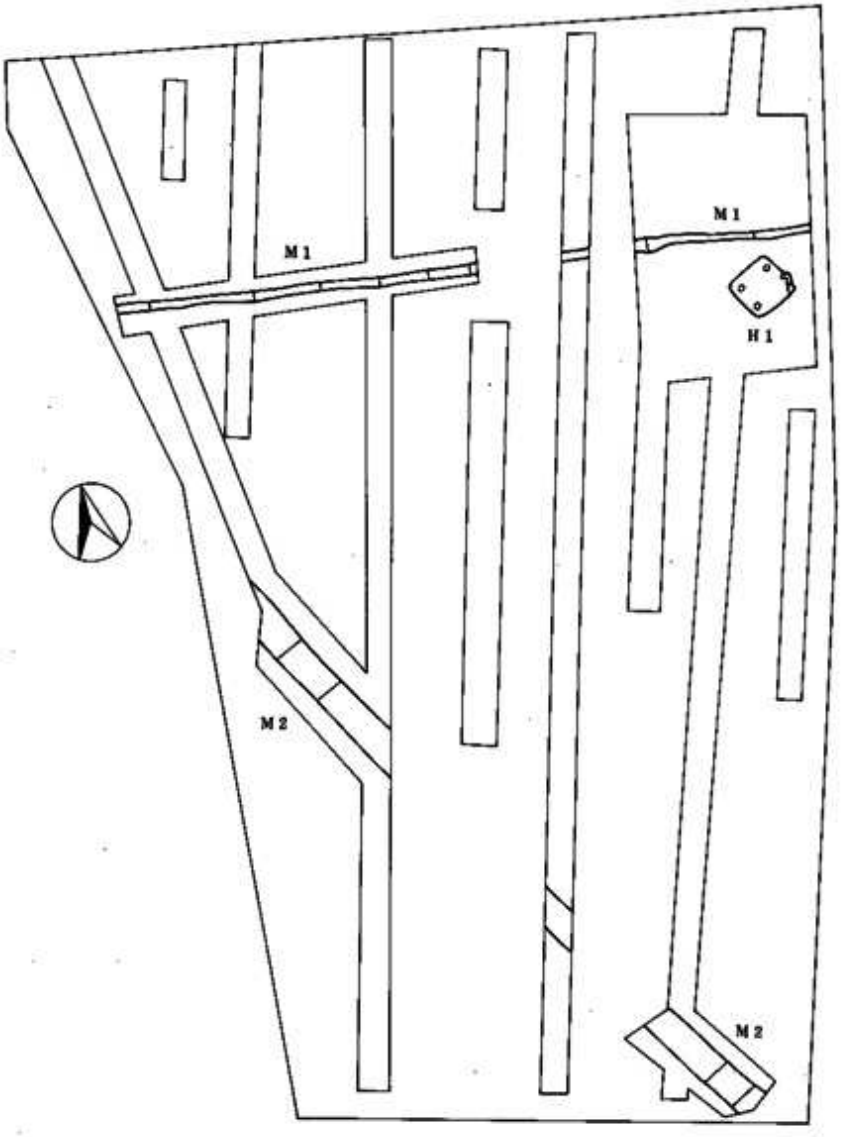
挿図番号	器種	法量 cm	形態の特徴	手法の特徴	備考
14-4	甕	口径20.1 底径 3.6 器高27.0	長胴で底部は薄い。 口辺は短く外反する。頸部はコの字。	口辺内外面 頸部・胴上部外面ロクロヨコナデ 頸部・胴部内面ヘラナデ 胴部外面ヘラケズリ。	
14-5	甕	口径21.3 現高15.1	頸部「コ」の字を呈する。	口辺部内外面ロクロヨコナデ。 胴部外面ヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。	
14-6	甕	口径22.3 現高15.1	頸部「コ」の字を呈する。	口辺部内外面ロクロヨコナデ。 胴部外面ヘラケズリ。胴部内面ヘラナデ。	
15-1	坏 (須恵)	口径(14.8) 底径 5.4 器高 4.6		内外面ロクロヨコナデ。 底部回転糸切り。	
15-2	坏	口径14.4 底径 7.0 器高 4.5		外面ロクロヨコナデ。 内面暗文風ヘラミガキ。 底部回転糸切り。	
15-3	坏	口径13.0 底径 5.9 器高 4.0		外面ロクロヨコナデ。 内面暗文風ヘラミガキ。 底部回転糸切り。	
15-4	坏	口径16.2 台径 7.4 器高 6.1	貼り付け高台	外面ロクロヨコナデ。 内面暗文風ヘラミガキ。 底部回転糸切り後台部貼り付け。	

トレンチからは、平安時代の甕片・坏片・灰釉破片、縄文時代中期の深鉢片等が出土したが、実測できたものはなかった。

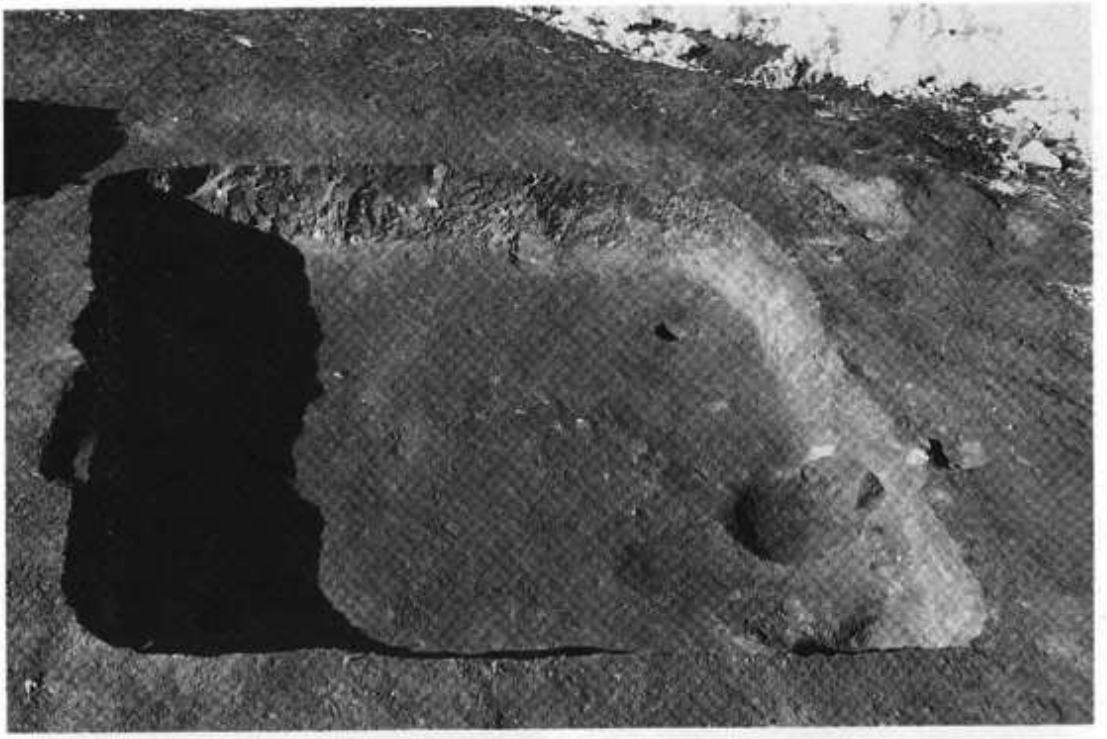
既出遺物は、付近の畑で耕作中に発見された一群で、おおむねすべてについて図示した。発見された遺物は、平安時代中期の土師器の甕と坏、須恵器の坏、炭化種子である。炭化種子は、信州大学農学部教授氏原暉男氏の鑑定により、マメ類と判明した。発見者によると、種子は土器の底部にまとまってあったそうである。

第Ⅴ章　まとめ

蛇塚Ｂ遺跡群野馬久保遺跡より検出された遺構は、住居址１軒と溝状遺構２条である。住居址は、ロクロ土師器の坏と高台付坏、甕が主体を占めること、頸部「コ」の字形態の甕の消失、須恵器坏の消失等より平安時代の中期と考えられる。また溝状遺構は、断定はできないが、住居址とほぼ同一時期と推定される。また、検出された住居址の伴う集落は、調査区の西側に展開されると予想される。



第16図　野馬久保遺跡全体図



H１号住居址（南より）

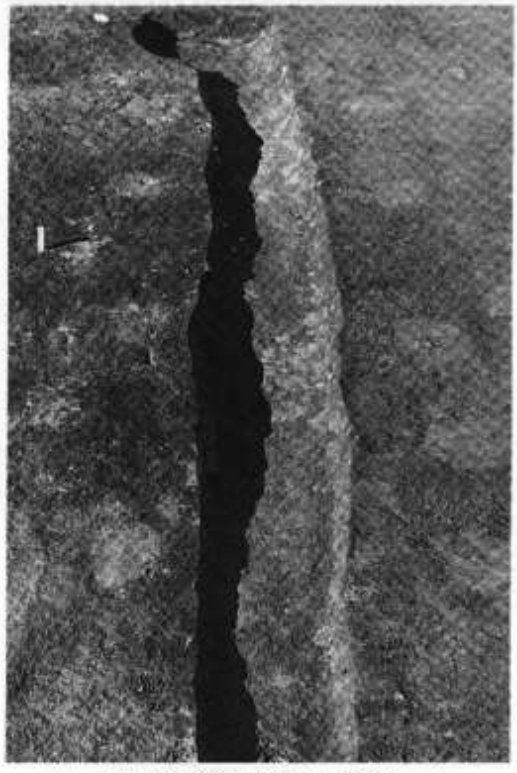
H１号住居址カマド（西より）

図版二

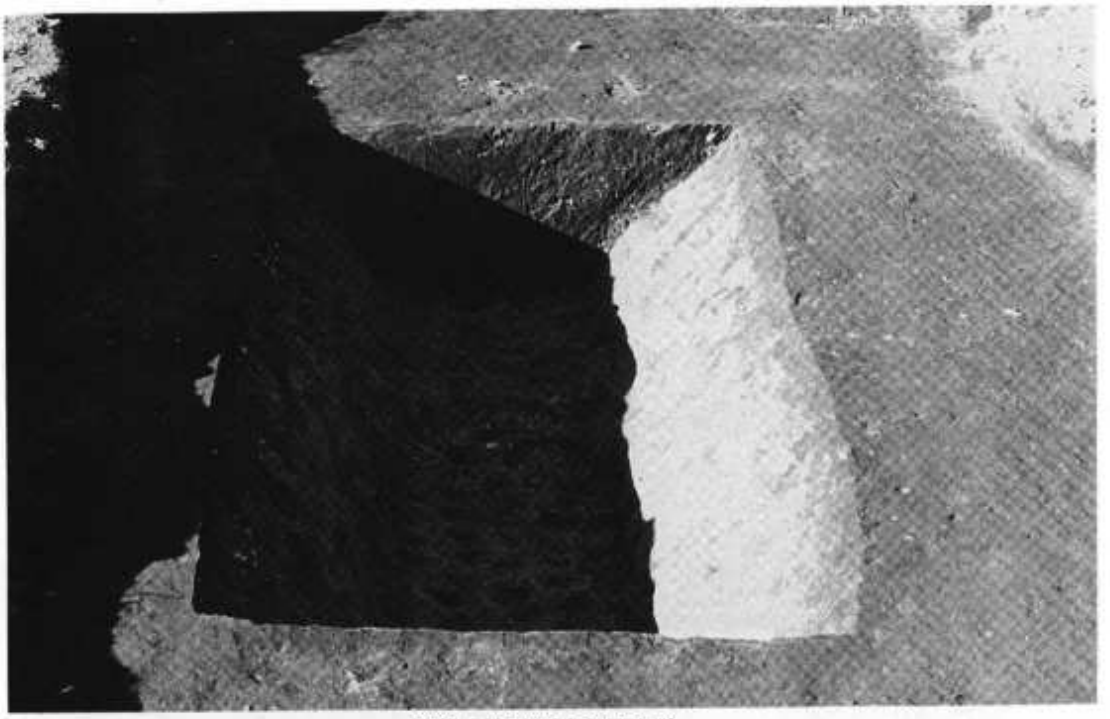
カマド煙道出口（真上より）

カマド掘方（西より）

M1号溝状遺構（西側、西より）



M1号溝状遺構（東側、東より）



M２号溝状遺構西区（東より）

M２号溝状遺構東区（東より）

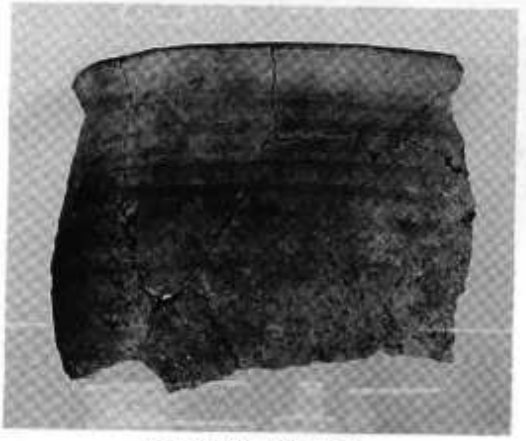
野馬久保遺跡近景（北東より）

M２須恵器甕（14－１）１：４

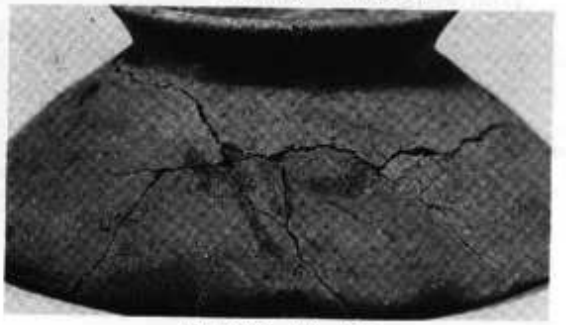
H1甕底部木葉痕（7－2）

H1甕（7－2）1：4

H1坏（7－3）1：4



H1甕（7－1）1：4



H1坏（7－3）墨書

H1坏（7－4）1：4

H1坏（7－4）墨書

H1坏（7－6）1：4

H1坏（7－7）1：4

H1坏（7－5）1：4

図版六

H1坏（7－15）1：4

H1灰釉（7－17）1：4

H1灰釉（7－16）1：4

H1刀子（8－1）1：3

H1麻引（8－2）1：3

H1鉄滓（8－3）1：3

M1打製石斧（11－1）1：3

佐久市埋蔵文化財調査報告書　第15集
蛇塚B遺跡群
野馬久保遺跡
長野県佐久市新子田蛇塚B遺跡群野馬久保遺跡発掘調査報告書
1992年3月
編集・発行　佐久市教育委員会
佐久埋蔵文化財調査センター
〒385　長野県佐久市大字志賀5935
TEL　0267-68-7321
印刷　信毎書籍印刷株式会社